

空海の霊魂観

——救済と供養の思想——

村上保壽

(高野山大学)

空海の『性霊集』の中に高野山開創の際の「敬白文」や故人の年忌供養の際の「願文」などがある。これらの内容は、山中の諸霊や故人の霊などを対象としているものである。この事實は、空海が明確に霊魂の存在を前提に敬白し、霊の供養をおこなっていることを示している。

ところで、霊魂と供養の問題は、霊魂の不滅あるいは死後の存続を前提とする生死観にもとづいている。しかし、無我説に立つ仏教は、明らかにこの霊魂という実体的自我の存在と存続を否定している。その意味では、仏教が死後の霊魂に対して供養することはおかしいことになる。

ところが、古代世界のほとんどの民族は、霊魂の不滅や死後の存続を信じ、祖霊崇拜の儀礼をおこなっている。日本においても、ひとびとは、霊魂の存続を信じ、「ひと」や「もの」がタマやケ、すなわち霊魂・霊気を宿していると考えている。つまり、アニミズム的自然観・霊魂観を根底に仏教儀礼による祖霊供養を行ってきたことは認めざるを得ない事実である。空海もまた、「敬白文」や「願文」などを見る限り、古代日本人のアニミズム的自然観・霊魂

觀に立つて、諸鬼神という言葉で靈的存在を考えていたことは確かである。そこでまず、これに関する記述から空海の靈魂觀を見ていきたい。

一 空海のアニミズム的靈魂觀

空海のアニミズム的靈魂觀を端的に示しているのは、『性靈集』卷第九にある「高野建立の初の結界の時の敬白文」に見られる次の記述内容である。

沙門遍照金剛、敬つて十方の諸仏、兩部の大曼荼羅海会の衆、五類の諸天及び国中の天神地祇、並びに此の山中の地水火風空の諸鬼等に曰さく。⁽¹⁾

この記述から次のことがわかる。まず、(イ) 山中の五大の諸鬼が餓鬼趣に輪廻する諸鬼ではなく、自然界に宿る精靈(アニマ)を意味していることである。空海は、この靈的存在をカミとして捉え、天神地祇と共に祭祀している。いわば、自然界の靈は、畏怖の対象として祭られるカミ以外の何ものでもないと捉えているのである。

次に、(ロ) 諸鬼が十方の諸仏、兩部曼荼羅海会の諸尊、五類の諸天と共に啓白の対象になっている。すなわち密教世界の中に組み込まれている。その意味では、この諸鬼は密教世界を護る護法神、善神鬼として意識されていることになる。

そして、この「敬白文」に七里結界の言葉、すなわち『陀羅尼集經』卷第四にある七日作壇法の記述からの引用がある。それは、「所有^{あゆ}一切の正法を破壊せん毘那耶伽、諸の悪鬼神等は、皆悉く我が結界の処七里の外に出で去れ⁽²⁾」という文言である。この悪鬼神は、明らかに六道に輪廻する餓鬼(プレータ)である。しかし、ここで空海の問題に

している諸鬼はそのような輪廻する諸鬼すなわち靈的存在のみではない。

すなわち、(ハ)この悪鬼神は、自然界に住まい、正法や人びとの健康などを破壊するアニミズム的な、その意味では漠然とした悪霊、餓鬼(ブレータ)を含む悪鬼神一般として考えられていると見てよい。このような悪鬼神についての理解は、空海に独自のものではなく、例えば、『続日本紀』宝亀五(七七四)年四月十一日条にある光仁天皇の勅に「其れ摩訶般若波羅蜜は諸仏の母なり。天子これを念ずれば、兵革災害は国の中に入らず。庶人これを念ずれば、疾疫厲鬼^{れいき}は家の内に入らず」という言葉がある。この厲鬼は、いわば流行病のカミを意味している。当時の日本人が超自然的な威力を持った靈的存在を鬼と捉えていたことがわかる。

それはさて置き、この「初の結界の時の敬白文」の結びに注目すべき言葉がある。

願はくは此の道場は普く五類の諸天及び地水火風空の五大の諸神並びに此の朝開闢^{ちようかいびやく}已來の皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇を以て檀主とす。伏して乞ふ、一切の冥靈、昼夜に擁護して此の願を助け果せ⁽⁴⁾。

つまり、天皇の祖霊を祭祀の対象としていることと、一切の冥靈すなわち冥界の靈的存在に祈願していることから、(ニ)鬼神の觀念について、空海が祭られる靈としての死霊、祖霊一般を含めて理解していたと見ることができ。

しかし、空海が自然界の靈的存在・諸鬼神を密教世界の中に組み込んでいることから、靈的存在を密教の法身的宇宙觀や自然觀から把握していると理解できることである。ここから、(ホ)この自然界に内在する一切の靈的存在者を大日如来である「法」あるいは「靈的いのち」の顯現であるとする思考が読みとれることである。

二 もう一つの靈觀念と無我説

ところで、空海の靈魂觀を知る上で、それが仏教のいわゆる無我説とどのような関係にあるのかを明確にする必要がある。しかし、論理的に考えると、これから述べるように必ずしも整合するかどうかは問題である。

空海は、自我の存在について『秘藏宝鑰』第一住心の頌で次のように述べている。

凡夫は善惡に盲ひて 因果あることを信ぜず

但し眼前の利を見る 何ぞ地獄の火を知らむ

差づることなくして十惡を造り 空しく神我ありと論ず

執着して三界を愛す 誰か煩惱の鎖を脱れむ⁽⁵⁾

ここで、空海は、人びとが善惡の何たるかに気づかず、因果の理法を信じない根本の理由を彼らが神我すなわち実体的自我の存在を主張していることに求めている。いわば、三惡趣である第一住心の本質を実体的自我の主張に見ているのである。この理解は、明らかに仏教の無我説を受けていることは明らかである。

そして、空海は死後の靈魂の存続を認めない断見とそれを認める常見とを次のようにはっきりと否定している。

有るが云く、人は死して氣に歸り更に生を受けずと、此の如くの類を断見と名づく。有るが云く、人は常に人たり、畜は常に畜たり、貴賤は常に定まり、貧富は常に分かれたりと、此の如くの類を常見と名づく。(略) 出要を知らずして、妄見を祖とし習へり。是の如き等類は、皆羝羊の心なり。⁽⁶⁾

すなわち、死後の実体的自我の存続を否定する者も、肯定する者ともに迷いの世界を出離する要を知らず、迷妄

の見解をもとにして、それにしたがっており、このような類の者は羝羊の心の世界に住している者にほかならないことを述べているのである。そして、一切衆生の心性を次のように理解している。

一切有情は心質しんぜつの中に於て一分の淨性あり。衆行、みな、備はれり。その体、極微妙にして、皎然こうぜんとして明白みょうびやくなり。ないし、六趣に輪廻りんごすれども、また變易(7)せず。

すなわち、衆生に本来ある「心質」すなわち一心の本質には一分の清らかな性質・仏性がある。この一心の本質は、生まれ生まれ、死に死んで、仮に六道に輪廻転生しようとも変わらない、という理解である。

それでは、この一心の本質・仏性の存在を前提にこれまでの空海の言葉を整合的に考えようとするのであろうか。答えは、断常二見を否定する立場から「空しく神我ありと論ずる」という言葉を理解することにあると思う。すなわち、空海は、靈魂の存在そのものを直接否定しているというよりも、実体的自我（靈魂）の实在を主張し、その实在に執着する心（自己意識）の存在を否定していることと見ることができるのではないだろうか。

それ故に、空海が死者の靈魂の存続を常見として否定していること、一切衆生にある一心の本質を仏性と理解していることからすると、空海が古代日本人のアニミズム的靈魂觀とは異なった「靈」觀念を持っていたことは確かである。すなわち、空海は、実体的自我（個我）の实在性とその存在の普遍的本質（仏性）とを明確に区別して捉えていたのではないかということである。

このことを具体的に言えば、例えば、多くの日本人は、今でも怨みを抱いて亡くなった人の靈魂が死後においてもその意識のまま存続していると考えている。ところが、空海は、このような「自己意識を持った靈魂」すなわち実体的自我の存続をはっきりと否定しているのである。しかし、亡くなった人の普遍の仏性ともいべき靈性の存続につ

いては認めていると考えられるのである。

すなわち、空海は、靈魂（我）の實在的存続の「意識」については否定しているが、その普遍の本質いわば靈性（仏性）については認めているということである。したがって、藤原葛野麿の三回忌に「此の良縁を藉^かって、尊靈を翊^かけ奉らむ。（略）広く無際を羅^くめて普く不生に入らしめむ⁽⁸⁾」と述べ、あるいは「前の清丹州の亡妻の為の達囀^{さき}」で「此の法力を以て、先靈を開悟せしめむ⁽⁹⁾」と述べて、亡き人の成仏を祈るとき、空海がその普遍的靈性を一心の本質である仏性として把握していたことは明らかである。このように理解すると、空海の「靈」觀念と靈の救済（成仏）の意味がある程度整合性をもって理解することができるのである。

三 救済と供養の思想

空海の願文や表白文の大部分は、死者の追善菩提を願う内容になっている。これについて、この頃の史料を出せば、たとえば、『日本靈異記』上巻第三十三に次のような記述がある。

其の夫の死なむとする日、斯の佛の像を造り奉らむと願ひて、貧しきに縁^よりて未だ遂げず、多く歳月の数を経たり。終に秋に至りて穂を拾ひ、便^{すなわ}ち畫師を請^うけ、親^{みづか}ら載^はめて靈に供養し、情^{こころ}に泣き悼^{かな}ぶ。⁽¹⁰⁾（略）因りて齋会を設^{まつ}く。

すなわち、夫の臨終の日に仏（阿弥陀仏）像を図繪し、靈に供養しようと願をおこしたが、貧しいためになかなかできなかった。それでも苦勞して、遂に成し遂げた妻の話である。

これと比較的に類似する空海の願文を出すと、『性靈集』巻第七に「故^{もと}の藤中納言の為に十七尊の像を造り奉る願

文」がある。要約すると、次のような意味の記述である。

「亡き入唐大使中納言藤原氏は、誠をもって四帝に仕えた人である。わたしは一緒に数々の危険を冒しながら唐に渡り、生死をとにもすることを誓いあった。それなのに、思いもよらず、みまかられてしまった。臨終の折、氏はわたしに紫綾しりようの文あやのある服を形見に与えていかれた。今、廻向してかの人に功德を施し、逝きり行きし人の情に報いたい」と述べて、次のように続けている。

謹んで弘仁十二年九月七日を以て、綾服を地と為し、金銀を綵さいと為して、十七尊曼荼羅一鋪三幅を図し奉り、並びに大衆金剛不空三昧耶理趣經一卷を書写して、兼て香華を設け、仏に供し、經を演のぶ。(略)伏して願はくは、此の良縁を藉かつて、尊霊を翊かけ奉らん。(略)広く無際を羅こめて普あまく不生に入らしめん。(11)

ここで霊の問題についていえば、空海は、藤原葛野麿の尊霊すなわち死霊がさとの世界・大日如来の境界に至ること、いわば成仏することを祈願している。この霊は、カミとして祭られる霊あるいは慰霊される霊ではない。明らかに、大日如来の不二の境界に住することを願われている霊以外の何ものでもない。その意味で、密教世界の中で把握され考えられている死霊の観念であることがわかる。

このような、「成仏を願われる霊」を密教世界の中に位置づけるとき、その供養と祈願の目的は、究極的には大日如来の徳性と智慧に結縁させることにある。そして、このさとの世界に至らしめんと願う思想は、実は、本質的に成仏思想にはかならない。したがって、衆生の死後における成仏を祈願する行為そのもの（引導法）がまた、追善菩提を願う供養の意味を有していることがわかる。

この成仏を願われる霊は、明らかに実体的なアニミズム的精霊・自然霊、あるいはこの現象世界・現世に悪鬼神と

して住まう恐るべき靈ではない。追善供養を契機にさとりの世界を求め、そこに至ろうとする靈、いわば仏性そのものとして考えられている靈である。その意味で、救済される靈、成仏を願われる靈の本質は、衆生の仏性そのものにほかならないと言える。

四 崇る靈と空海の意識

最後に、靈における崇りの意識について、空海がどのようなスタンスを取っているかを考えてみたい。「救済される靈」の概念には、二つの意味がある。一つは、成仏を願われるが故に、救済される靈であり、二つは、未だ救済されていないが故に、その救済が問題となる靈すなわち「崇る靈」、慰撫されるべき靈である。

ある人の死靈がときに救済されずにいるとしたら、その靈は、恐るべき存在のままに在ることになる。死靈の崇りは、このような非救済の意識を前提にしている。『性靈集』巻第六にある二つの伊予親王に関する願文は、まさにこのような死靈の意識を前提にしているものである。

それでは、崇る靈つまり怨靈の意識について、空海はどのように考えているのであろうか。『性靈集』にある「東太上、故中務卿親王の為に檀像を造刻する願文」から見てみたい。

伏して願はくは、此の勝業に藉^かつて、梵魂^{ぼんこん}を抜き翺^{はね}けん。(略) 幽頭、福を同じくして、併しながら本有の五鏡に鑒^{かが}み、常に仏護^{ぶくご}に沐^{もく}して鎮^{しん}なへに法苑に遊ばん。(12)

ここで、空海は、伊予親王の孤独な靈（魂）が追善の功德によって救済されることを祈願している。その救済が密教の諸仏・菩薩・天・明王の造像、図像等と「本有の五鏡を鑑み」と述べていることから、親王靈の救済すなわち成

仏を密教の世界観と如来の智慧（五智）から把握していることがわかる。その意味では、この願文は、嵯峨天皇の意思がどの辺にあったのかはさておいて、死霊を慰撫する鎮魂の思想からではなく、空海自身の成仏思想から記述されていることがわかる。

このことをさらに明確にすると、『大日経開題』『隆崇頂不見』に次の言葉がある。

南無大日如来と海会の諸尊と同一に引導をあたえ給へ。長逝の尊霊をして速に三界の憂国を出でて早く四徳の樂城に送りたてまつらん。⁽¹³⁾

すなわち、大日如来と諸尊がともに引導を与えられて、永遠に逝った尊霊が三界の憂国を出でて、四徳の安樂の城（常樂我淨のさとり）の仏国土に送られることを祈願している。

そして、もう一つの願文では、天皇自身に親王の死霊を慰撫しようとする意思のあったことを窺い知ることができる。この願文は、淳和天皇が伊予親王の死の二十年後に、親王のために法要を営んだ際のものである。すなわち、「天長天皇、故中務卿親王の為に田及び道場の支具を捨てて橘寺に入る願文」がそれである。

その記述は、純粹な性質とすぐれた智慧を持っていた親王が若くして薨去されたことに「哀れなる哉、悲しい哉」と述べ、「聖襟慟んで味を忘れ、凡庶惨んで相せず。性は恩の深きを愛し、福佑を崇んことを思う⁽¹⁴⁾」と記している。すなわち、淳和天皇は深く慟哭されて食物の味もお忘れになるほどであり、庶民は悲しんで杵歌も口にしないほどである。天皇は親王の恩情の深いことを愛され、ただ冥福の成就を祈るのみであるという。

「凡庶惨んで相せず」という言葉から推測すると、おそらくこの時期、気候不順等の原因で不作等が続き、畿内を中心に大飢饉が襲ったのではないかと思われる。そのために、二十年後、兄弟である伊予親王の死が政治的に大きな

意味を持ってきたことを示しているのではないだろうか。いわば、この時期、伊予親王の靈は、淳和天皇はもちろん民衆にとつても、慰撫されるべき靈すなわち怨靈として強く意識されていたことがわかる。

ところが、空海は、この願文の終わりに自身の願を次のように記している。

伏して願はくは此の法水を沃^{そそ}いで彼の梵^{けい}靈を洗はん。性蓮^{たちま}乍^{ひら}ちに発^はけて微塵の心仏を顯はし、心法^{たちま}忽^{たちま}ちに開^{ひら}けて恒沙の遍智を証せん。（略）鴻臚^{こうろ}を開いて以て亭毒せん。同じく饒乳^{はん}の味に飽きて齊^{ひと}しく阿字の閤⁽¹⁵⁾に遊ばん。

すなわち、伏して願うことは、この妙法の功德を甘露の水のように沃いで、亡き親王の孤独な靈を洗い浄めたい。

本来清浄である心中の蓮華は、一瞬のうちに花開いて無数の心中の仏を現出させ、心中の仏法はただちに開いてガンジス河の砂のように無数の全智の仏を証し出すことであろう。そして、大いなる無尽莊嚴の密教の教えに化育されて、共に饒字で示される醍醐の法味に堪能し、等しく阿字で表される法界宮殿の境地に遊びたい、と結んでいる。

この祈願は、空海が、親王の孤独な靈が心中の仏を現出させ、心中の仏法を開いて、大いなる密教世界の中でさとの境地、すなわち金剛界大日如來の智慧と胎藏生大日如來の実相世界に住することを願っていることを説明している。ここには、「救済される靈」、成仏を祈願される靈の意識が明確に示されている。その意味で、このときの空海には、淳和天皇や民衆にあるような祟る靈・怨靈の存在を直接問題にしようとする気持はなかったと見ることができ、空海にとって死者の靈（魂）は畏怖と慰撫の対象すなわち鎮め祭られる靈・カミではなかった。その意味では、當時の怨靈・祟る靈の思想にとらわれることなく、大乘仏教の救済の思想と、そして真言密教の世界觀と成仏思想とから死者の靈（魂）をあくまでも仏性として把握しようとしていたことがわかる。

結 語

これまでのことをまとめると、靈魂観としては、第一に、アニミズム的自然観・靈魂観の立場を根底に自然界の精霊を自然神、すなわち「祭祀される霊・カミ」として把握されているが、その霊・カミは、あくまでも大日如来の現れとして密教世界（曼荼羅世界）の中に位置づけられている。

第二に、「救済される霊」の問題である。この霊は、「成仏を願われる霊」と「慰撫される霊」に分けることができるが、空海は死者の霊の本質を仏性そのものと捉えることによって、その霊性を「成仏を願われる霊」と理解している。この霊性は、実体的なアニミズム的概念ではなく、非人格的な性質や力という意味ではマナイズム的概念といえる。

そして、「慰撫される霊」、鎮め祭られるべき霊・魂（タマ）については、「願文」などから見る限り、崇る霊・魂すなわち怨霊として意識していたとは考えられない。

第三に、空海は、仏教の無我説との関係で実体的自我（靈魂）の存在意識をはっきりと否定しているが、その我を存在させている普遍の存在性ともいうべき霊性、すなわち一心の本質ともいうべき仏性を認めている。空海の供養の思想は、この霊性（仏性）の存在を大前提に考えられていると言える。

注

(1) 空海の引用は、『定本弘法大師全集』（以下『定弘全』）（高野山大学密教文化研究所刊）によった。

- (1) 『性靈集』 卷第九・一七七頁（『定弘全』 第八卷）。
 - (2) 同 一七九頁、『陀羅尼集經』 八一三頁下（大正十八）。
 - (3) 『続日本記』 四・四三二頁（新日本古典文学大系15、岩波書店）。
 - (4) 『性靈集』 一七八頁。
 - (5) 『秘藏宝鑑』 一一九頁（『定弘全』 第三卷）。
 - (6) 同 一一八―一九頁。
 - (7) 同 一七一頁、『菩提心論』 五七四頁上（大正三十二）。
 - (8) 『性靈集』 一一一頁。
 - (9) 同 一一六頁。
 - (10) 『日本靈異記』 一三二頁（小田祝夫校注・訳、日本古典文学全集・小学館）
 - (11) 『性靈集』 一一一頁。
 - (12) 同 一〇〇―一頁。
 - (13) 『大日経開題』 五〇頁（『定弘全』 第四卷）。
 - (14) 『性靈集』 九四頁。
 - (15) 同 九五頁。
- 本論は、拙著『弘法大師の救済論―密教における霊と救済―』（高野山出版社・平成十一年）の一部をまとめたものである。詳しい内容は、この書を参考にしていただきたい。
- キーワード 空海、靈魂、靈性